

枕草子における〈下衆〉の言辭について

森野 宗明

目次

- 一 小論の狙いとあらまし
- 二 「僧都の御乳母のままなど」の段の下衆の言辭——その一
- 三 「僧都の御乳母のままなど」の段の下衆の言辭——その二
- 四 「懸想人にて……」の段の供人の言辭について
- 五 しめくくり

一 小論の狙いとあらまし

『枕草子』には中関白家関係者を中心とした貴族たちの宮廷人たるにふさわしい優雅で洗練された振舞の数々が描かれている。それと同時にその一方では、貴族社会の下層に位置する男たちの、平生昌の場合にその好見本を見いだせるような、宮廷的風儀（特に女性の目からみた）規準に適合しない逸脱した言動の描写、さらにはより下層の〈下衆〉と一括される民衆の、貴族の感覚からすれば無知、鄙陋、粗雑、鈍感といった印象を強く喚起するような言動の描写が、点在している。この二つは、それ自体としてはまったく相容れない性質のものであるが、『枕草子』の構成する世界のなかでは、そうした負の価値を荷なわされて描かれている言動の描写が、全体の調和をそこなう不協和音として響くということはなく、それどころか逆に、その点在との対照において、上流社会において形成された独自の風儀の卓越性を、より一段と際立たせ、他の社会との間に隔絶した距離の存す

ることを、より一層明確に示すという役割を果して、効果をあげている。

右の負の評価のもとに描かれている言動のうち、平生昌の場合のような下層貴族におけるそれについては、たとえばその言辭のどういう点がどういう意味で規準から逸脱しているのかなどについて、相応の注意が払われてきているが、いわゆる〈下衆〉のそれについては、常識的な線を超えた論究に乏しい。また、そうした論考にしても、偏った先入観、たとえば、清少納言に対するその論者の好悪の情に動かされるなどのために、その描写の読みがゆがめられているのではないかと思われる^{ふし}が、まま目につく。総じて語学的究明が不徹底である。

一口に『枕草子』における〈下衆〉の言動の描写といつても、清少納言のなかに心理的というよりは生理的といつてよいほどに、無知、鄙陋、粗雑、鈍感などの負の価値感情を喚び起す誘因、つまりその言動の主体がほかなぬ〈下衆〉以外の何者でもないということの特徴づけている言辭、振舞がたやすく指摘できるような場合はばかりというわけではない。清少納言たちにとって自明であつても、我々にとってはかならずしも同じように自明であるとはかぎらず、一定の手順を踏んで始めてそれが見えてくる、確認できるといふ場合もある。語学的究明の徹底されていない憾みが痛感されるのは、いうまでもなくそのような場合においてである。

ことを言辭の面に絞つていえば、前者すなわちたやすく指摘できる場合の好例としては、「賀茂へまゐる道に」の段——三巻本系の陽明文庫本を底本とした日本古典全書版の『枕冊子』でいえば二百十二段。以下特に断らなにかぎり、『枕草子』の段の所在、本文の引用は、日本古典全書版の『枕冊子』による——に見られる、女たちの田植え歌の文言をあげることができる。それは、「ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植^{たは}うれ」という歌詞であるが、それを聞いて清少納言は、「ほととぎすをいとなめうたふを聞くにぞ、心憂^{こころ}き」と、いたく感情を害す。彼女を強く刺激したのが〈おれ〉そして〈かやつ〉という人称代名詞の使用にあること、言うを俟たない^①。この〈おれ〉は、強烈な卑蔑感——ときには親狎感——を伴う対称代名詞であつて、古くは記紀に、また下つては説話物語集その他に用例を拾うことができるが、平安時代の和文系文献では、この箇所以外にはたしかな例を見いだすことのできない、特異なことばである。清少納言たちにとって、およそ優雅とか繊細と

かと對蹠的な、典型的な卑語 (Vulgarsprache) として扱えられていたであろうことは推測にたくなく、その点では、⁽²⁾「かやつ」も、類例が若干同時代の物語のうちに見られるという点にいささかの違いがありはするが、類似的性質のことはと見做してよいと考えられる。貴族たちにとっては初夏の訪れを告げる鳥として歌心をそそる時鳥に呼びかけるのに、下賤な卑罵語を平気で口にするといいところに、田植え女の〈下衆〉以外の何者でもない鄙陋性の露呈を、清少納言は見ただのである。

右のような卑罵語の使用は、我々の目にもとまりやすく、そのまま見すごされてしまうということはずなすが、いつもそのように単純な描写ばかりで埋められているわけではない。手がこんでいるため、表面をかいなでするだけですませてしまい、清少納言の意図するところを看過しかねないような描写の場合もある。その適例としては、「僧都の御乳母のままなど」(二百九十六段)の描写をあげることができる。

この段は、日記的章段の一つで、描かれている出来事は、萩谷村によれば、長保元年八年九日から同二年二月十一日まで、敦康親王出産のために平生昌宅に定子が滞在していた間の、長保二年正月四日以後二月十一日までであった挿話ということになる(新潮日本古典集成版「枕草子下」、第二百九十四段頭注)。火災のために家を失った、市井に暮らす〈下衆〉と思われる「男」が「御匣殿の御局」の板敷近くに迷いこみ、なにがしかの憐憫を乞おうと窮状を訴えて長々と愚痴をこぼす。ところが、そのことばが滑稽であるというので、「御匣殿」すなわち定子の妹の四の君をはじめみな大笑いをしてしまう。清少納言は即興にその言葉尻をとらえた戯れ歌を詠んで一層の洪笑を誘う。歌詞を記した「短冊」を与えられた「男」は、文官の悲しさ、それがおのれを嘲弄した戯れ歌とも知らず有難く推し戴いて、さらにより大きな唾を買うというのがその挿話の内容である。

従来、この段は、清少納言における、さらには彼女が帰属する貴族社会における徹底した〈下衆〉Ⅱ民衆蔑視というゆがんだ人間観がむき出しに示されているとして、主として倫理的な観点から話柄とされることが多い。そうした方向から論究を深める努力も、もちろん重要なことであるが、この話の眼目が「男」の言辭そしてそれを踏まえた清少納言の即興の戯れ歌にあることを思うなら、〈男〉の言辭のどのようなところがどのような理由

で清少納言たちの嗤いを買うことになつたのか、そこにはどのような意味における〈下衆〉らしさが見いだせるのかといった言語面の探求、読みの掘り下げも、また、重要な仕事になるはずである。しかし、今までのところ言語面についての解釈は常識的な域を出ず、清少納言たちの嗤いの内容は、十分に闡明されているとはいえない。

後で本文を掲げるが、この「男」のことばの描写はかなり長い。『枕草子』には「おなじことなれども聞き耳ことなるもの」という段があり、諸本間に異同があるが、〈下衆〉の言辞の特徴として、「かならず文字あまりたり」(四段)ということを描きしている。無駄が目立ち冗漫だというわけである。この「男」の長々とした愁訴にも、そのような〈下衆〉の話しぶりによくみられるという冗漫さの現われという面を読み取ることができ、そればかりではなく、過密ともいえるほどの敬語の使用も、話を長たらしくするうえで大きな要因となっている。そのほか丁寧ともいえるべき丁寧な話しぶりについては、従来も注意されてきたが、しかし、話し手と聞き手との間の隔絶した格差を考へるならば、丁寧な口調は、むしろ当然と称すべく、それがただちに嗤いを喚ぶ理由になるとは考へがたい。

では、清少納言たちを刺激して嗤いを招く結果になつた言辞は何か。その解明が小論のねらいであるが、あらかじめそのあらましを記せば、以下のごとくである。

「男」はその愁訴のなかで、焼失した我が屋の寢所を指して〈夜殿よどの〉と言っているが、この〈夜殿〉ということばの使用に問題があると考へられる。寢所を指して用いられる語群を、熟さぬ言い方ではあるが、いま仮りに〈寢所〉語彙と名づけるならば、平安時代の和文の世界における標準的な用語は〈ねや〉であろうと考へられる。その〈ねや〉を無標 (unmarked) とすれば、〈夜殿〉は、二重の意味で有標 (marked) であると思へることができらる。

二重の意味ではどういふことか。まず、〈殿〉の関連から寢殿造りのそれといった大邸宅の寢所が連想されやすく、微々たる陋屋のそれは連想されにくかつたのではないかと思われる。つまり、単に寢所を指すのみにと

どまらず、そう明確な形ではなかったかもしれないが、貴賤観が付帯してその意味が構成されていたのではないかと考えられる。その点で、「男」が清少納言たちからみれば陋屋以外の何物でもないその住いの寢所を指すのに《夜殿》を用いたということは、清少納言たちにとっては身の程知らずの厚かましさと映って当然のことと思われる。この際、看過されてならないのは、全体がばか丁寧ともいふべき丁寧な口調で通されているという事実である。丁寧懇懃な口調で一貫しているだけにこの《夜殿》だけがそれとうらはらに僭越尊大な印象を与えて浮き上がり、全体の均整が一気に崩れて、それだけ奇妙な滑稽感がより強く醸成される。つまり、ばか丁寧な口調は、《夜殿》使用の奇矯さを引き立たせるための地としての機能をはたしているのであって、《夜殿》との対照を抜きにして云々すべきではないと考えられるのである。

それにしても、相手とおのれとの身分のへだたりを十分にわきまえ、そうした態度を言辭に反映させて謹肅感の強い言辭を選びながら訴えている一方で、なぜ唐突にそうした姿勢とまっとうから矛盾する《夜殿》の使用が現われるのか。そこが《下衆》の《下衆》たるところといつてしまえばそれまでであるが、ここで見逃してはならないのが、《夜殿》のもう一つの有標性である。あとで詳述することになるが、和文系文献に徴するかぎりでは、散文にも和歌にも用いられる《ねや》と異なり、《夜殿》はその用例が和歌に集中する。つまり、《夜殿》は、寢所を指すのみではなく、それに文学表現用語としての文体的価値が付加して意味が構成されていると考えられる。和歌の用語は卑近な日常生活での用語にくらべて、上品なことは、優雅なことばとしての印象が伴いやすい。おそらく、この場合の「男」も、相手が上流の女性であるという意識から、上品なことばとして《夜殿》を用いたのであろう。もとより彼には和歌についてのたしかな素養は欠けている。こうした《夜殿》の使用が歌語の濫用以外の何物でもないことに気づきはしない。まして、前述した《夜殿》と貴賤観の連合性など思いも及ばなかった。清少納言に言わせれば、こざかしげに敬語を操り、もっともらしい用語についての知識もすこしはあるらしいとはいふものの、結局は付焼刃の悲しさで、肝腎なところで馬脚を露わすところが、所詮は《下衆》ということなのであろう。

馬脚を露わすといえ、〈夜殿〉のすこし前には、「がうなのやうに、人の家に尻をさし入れてのみさぶらふ」ということばがあつて、注意を惹く。〈夜殿〉とは対照的な鄙陋な印象を喚起する表現で、特に臀部を指して露骨に〈尻〉と呼ぶなど、貴婦人を聞き手とするような場面では無神経きわまりないもの言い方で、貴紳ならばまず口にしないのをもつてたしなみとしたところである。こうした卑猥感を強く喚起するような言辭と〈夜殿〉とは氷炭のごとき間柄であり、同一の文脈には共存しないのを原則とする。先述の全体としての感觸丁寧な口調と〈夜殿〉の適正を欠いた使用の場合に通じるような關係が、「がうな……」と〈夜殿〉との間にもみてとることができるわけで、均整を失した奇妙な対照が、〈夜殿〉の使用を宙に浮かせて印象づけるうえで大きく機能しているという事實を見落としてはなるまい。

右のように「男」のことばのポイントは〈夜殿〉の使用にあり、清少納言たちの嗤いの内容を闡明するためには、〈夜殿〉の有標性に注目して、その使用が適正を得ているか大きく逸脱しているかを子細に吟味するという手順を踏むことが必要不可欠なのであるが、従来は、せいぜい〈殿〉と貴賤観との連合に目を向ける程度にとどまり、〈夜殿〉の二重の有標性の持つ意味がほとんど解明されないままに放置されていた。その解釈が皮相の域を超えることができなかったのは当然といふべきであらう。

ところで、この例の〈夜殿〉の使用にみられるような〈下衆〉の言辭は、「賀茂へまゐる道に」の段の田植え歌の類にくらべると、そのおもむきに相違のあることが明らかである。如在がないようで無神経であり、ものを知っているようで大切なところで無知を暴露する、いふなれば都会型の〈下衆〉の言動の典型として把握され描写されているという感が強い。田植え歌の類にみられる単純な言辭のそれにくらべて、清少納言がより嫌いより愚弄したのは、どうもこの型の言辭であつたように思われる。『大鏡』には、「下腐なれども京はとり」ということばがある。等しく〈下衆〉と呼ばれても京の城内やその周辺の住民は、地方の住民にくらべて生活環境の違いから、読み書きも一応はでき、ときには詩歌のような風流韻事についてもある程度の知識を身につけているといった連中が結構いたようである。文筆の練達や風流韻事のたしなみの有無は、貴族と〈下衆〉とを分つ重

要な標識の一つであり、貴族の側からみるならば、〈下衆V〉がその方面の能力、知識を身につけることは身の性をわきまえぬ潜在であり、貴族の独壇場に対する厭うべき侵犯であるにはかならない。ただ、そうした連中は、えてして生半可であり、そうした知識を振り回せば、どこかでほろを出す。所詮は猿真似の域を出ず、〈下衆〉の愚かしさを露呈して嘲笑を浴びるのがおちである。焼け出された「男」の愁訴はまさにそれであった。罹災した「男」に対して一片の同情をも寄せず、それどころから徹底して嘲弄する清少納言に対する評者の風当たりは強いが、おそらく清少納言にとっては、この種の〈下衆〉の言辭はもっともその神経に触れる類のものであったのであろう。そうした清少納言の、言辭に即しての〈下衆〉観を考察するうえでも、この「男」のことばの描写の綿密な分析は重要な意義を持つのである。

以上、「僧都の御乳母のままなど」の段の〈男〉の言辭のうちに清少納言が見いだした〈下衆〉らしさがどのようなものであったか、その概略を述べた。それは、かのプレシヤーズ (Prechense)、すなわち旧体制のフランスのサロンを彩った才女たちを思わせる、いかにも清少納言らしい言語観、言語を通しての人間観を覗かせているが、以下においてあらためて具体的に考察してみたい。

なお、〈夜殿〉のごとき、特定の知識を前提としなければ使用するのがむずかしいと思われる言辭が『枕草子』の描く〈下衆〉のことばのうちに、まま見受けられることについては、筆者とは根底から異なる見地から照射を当てている論説もある。そうした論説に対する批判も、途次織りこみながら筆をすめることにする。

二 「僧都の御乳母のままなど」の段の下衆の言辭について—その一

まずはじめに「僧都の御乳母のままなど」の段の全文を掲げる。すでに断っておいたように日本古典全書版によって示す。

僧都の御乳母のままなど御匣殿の御局にゐたれば、男のある、板敷のもとと近う寄り来て、「からい目を見さ

ぶらひて、たれにかは憂へ申し侍らむ」とて、泣きぬばかりのけしきにて、「なにごとぞ」（『日本古典全書では、清少納言のことばとするが、別の女房のことばと解すことが可能だし、その方が自然か。筆者注）と問へば、「あからさまにものにまかりたりしほどに、侍るところの焼け侍りにければ、がうなのやうに、人の家に尻をさし入れてのみさぶらふ。馬づかさの御株積みて侍りける家より出でまうで来て侍るなり。ただ垣をへだてて侍れば、夜殿に寝て侍りける童も、ほとほと焼けぬべてなむ。いささかものもとりで侍らず」などいひるを、御匣殿も聞きたまひて、いみじう笑ひたまふ。

みまぐさをもやすばかりの春の日に夜殿さへなど残らざるらむ

と書きて、「これを取らせたまへ」とて投げやりたれば、笑ひののしりて、「このおはする人の、家焼けたなり」とて、いとほしがりて賜ふなり」とて取らせたれば、ひろげてうち見て、「これは、なにの御短冊にか侍らむ。ものいくらばかりにか」といへば、「ただ読めかし」といふ。「いかでか、片目もあきつかうまつらでは」といへば、「一人にも見せよ。ただいま召せば、とみにてうへへまゐるぞ。さばかりめでたきものを得ては、なにをか思ふ」とて、みな笑ひまどひ、のほりぬれば、「一人に見せつらむ。里に行きていかに腹立たむ」など、御前にまゐりてままの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも「など、かくものぐるほしからむ」と笑はせたまふ。

〈男〉のことばの引用は、長短とりませて三箇所あるが、ともに先に述べたようにきわめて懇懃丁寧な口調であり、おそらくは平身低頭して長りながら訴える、その〈男〉の姿を髣髴させる。その通刺とも思われる敬語の使用は、聞き手に対する話し手の謹肅的態度の端的な表出である。〈さぶらふ〉〈はべり〉の使用然り、〈まかる〉〈まうでく〉そして〈つかうまつる〉の使用もまた然りである。おのれの妻を指して〈わらはべ〉と称しているのも、現代語でいえば、「愚妻」に当たり、謙抑の姿勢をこのことばに託して表現したものにほかならない。こうした敬語の使用は、田中重太郎編著の「校本枕冊子」に依れば、諸本間に若干の異同が認められるもの、おおむね同様であり、論旨に支障が生ずるような相異はない。

まず、目につくのは、〈はべり〉の頻出である。清少納言は敬語の使用に関しては一家言を持ち、「文のことはなめき人こそいとにくけれ」(二百四十六段)には、彼女の敬語論とも称すべき言説が繰り扱げられているが、そのなかに〈はべり〉に触れて、「ここともとに「侍り」などいふ文字をあらせばやと聞くこそおほかれ」と述べた箇所がある。主として下級の侍女、下女クラスを念頭に置いての批判と思われるが、清少納言の周囲にも、彼女の規準に従えば、〈はべり〉を適確に使いこなせない、その意味において無作法なもの言い方をする手合いが決して少くはなかつたのであろう。その点、この〈男〉のことばには、やや耳障りなほどに〈はべり〉が用いられており、下賤なものとばとしては、できすぎともいえるほどに、身分の格差をわきまえた慇懃な話しぶりになっている。

〈はべり〉に混って〈さぶらふ〉が用いられているのも注意されてよい。「からい目を見さぶらひて」の「さぶらふ」が、伺候・近侍という実質的な存在属性の表示という意味を稀薄にした、聞き手に対する謹肅畏敬の態度の表示という待遇の意味を主として担う、丁寧語化へ大きく傾斜した用法であることは、異論の出る余地がないといつてよからう。かつてこの〈さぶらふ〉の用法については、「丁寧語」候ふ』の発達過程について——中古・院政期初頭における状況——」(『國語學』六八集・昭和四十二年三月)において述べたことがあるが、十一世紀初頭あたりでは、まだ用例も少く、おのれを聞き手の支配下に隷属するものとしてとらえ、その言動をひたすら謙抑して話柄化するような場合に用いられる、いわゆる被支配待遇的色彩を濃厚に帯びたものであったと考えられる。この場合の〈さぶらふ〉はまさにそのような用法の典型といつてよい。〈はべり〉のなかに、かかる〈さぶらふ〉を混えることによつて、〈男〉の辭を低うして清少納言たちに接している様子が、よりいっそう際立っているところに注目したい。

被支配待遇表現ということでは、「まかる」「まうでく」そして「つかうまつる」も注目される。

「馬づかきの御秣積みて侍りける家より出でまうで来て侍るなり」の「出でまうで来」について、池田龜鑑は「全講枕草子」のなかで注釈を施し、「まうで」の語不審。自分の行動とも解されぬことはないが、出火の意の

『火いで米』をていねいに言ったものと解する方がよいであろう」と記している。「自分の行動」云々がもう一つよくわからないが、『まうで』の語不審」と考えたのは、おそらく典型的な謙讓語としての「まうで」を念頭に浮かべ、それにひっかかったのであろう。日本古典文学大系版の『枕草子・柴式部日記』の頭注で『出でまうで米』の表現に笑いがある」と記しているのも、謙讓語としての「まうで米」を当ててのことと思われる。いうまでもないが、謙讓語としての（まうづ）は、参上する意の求心性移動を表わす動詞である。したがって實所に向って参上するような場合に用いられるのを通則とする。もし、この例が謙讓語としての用法に従ったものであるとすれば、敬意の対象は話し手である（男）自身ということになり、まじめな愁訴のことばだけにすこぶる滑稽なことになる。たしかに「笑いがある」ということになるであろう。なるほど、話し手がみずから待遇することになるような、いわゆる自己敬語としての例がないわけではない。たとえば、『宇津保物語』の（へとしかげ）の巻には、時の帝の俊蔭の帰朝を悦ぶことばの描写に「かへりまうでできたれること」（宇津保物語本文と索引本文編25）とある。しかし治天の君のことばの描写と（下衆）のそれとでは次元が異なる。

また、『枕草子』の「頭の辨（ま）の御もとより主殿（ま）司（ま）多などやうなるものを」（百二十八段）は、頭弁行成がおどけた解文（ま）よりの文を添えて清少納言のもとに餅餠を届けたという話であるが、清少納言も負けじと「みづから持てまうで来ぬ下部（ま）は、いと冷淡（ま）なりとなむ見ゆる」と駄洒落を混えたおどけた文を返すというくだりがある。この「まうで米」も、一見尊大な印象を与える、謙讓語としての使用であるが、しかし、それを承知のうへの諧謔であり、これまた、「泣きぬばかりのけしき」で一生懸命訴える（男）のことばの場合とは同列に論ずることができない。

したがって、この（男）の場合の（まうでく）が自己敬語以外に考えようがないとすれば、それは無知による以外の何ものでもなく、嘲罵の嗤（ま）を招くのも当然ということになる。

ただ、ここで看過されてならないのは、（まうづ）とあればいつも典型的な謙讓語とかぎったものではないということがある。聞き手とおのれとの間に隔絶した格差があるという待遇上の認識から、おのれを聞き手の支配

下に隸属するものとしてとらえ、おのれのもとに誰かが訪れたり何かが出来たりすることを畏って話柄化する場合にも用いられることがあるのである。そうした被支配待遇的な用例は、〈まうでく〉に即しているならば、『宇津保物語』『落窪物語』『源氏物語』などに散見されるのであって、次に掲げるのはその一端にすぎない。

1 いかでか、はききよめむとおもひ侍しに、わらはいでまうできて、はらひあけてすませ侍らするに、またをのづからけだものなど、このみ・かづらくのねなどとりまうできて（下略）『宇津保物語』としかげ・「宇津保物語本文と索引本文編」83)

2 みだりがはしき事の出でまうで来にしかば、物も覚えで（下略）『落窪物語』巻二・「日本古典文学大系」一三二ページ)

3 かしこに侍りける下童の、たゞこの頃、宰相（＝女房名。筆者注）が里に出でまうで来て、たしかなるやうにこそ、言ひ侍りけれ『源氏物語』・嬉蛉・日本古典文学大系三三二ページ。「源氏物語大成」によれば諸本異同なし)

1は、少年仲忠がそのう、つぼの住まいを訪れた貴人実は父の兼雅におのれの身の上を語ることば、2は典薬助が落窪の姫を犯そうとして突然下痢に襲われ失敗に終わったことを権中納言の北の方に報告することばで、ともにわがもとに起ったことについて〈まうでく〉を用いている。3は、明石の中宮にその上臈女房大納言の君が語ることばであり、「宰相」はその仲間である。話し手自身ではないが、中宮に仕える女房としておのれに同化してとらえ得る人物であり、主従関係の場合には、このようにおのれに引きつけて扱うことは、従属する立場にあるものにとつてはごくあたりまえなことだ、類例が散見する。いずれも被支配待遇的な色彩を帯びた〈まうでく〉としてのみ処理することが可能な例であるが、より遡って、『古今集』の詞書に散見する「さくらの花のさけりけるをみにまうできたりける人によみておくりける」（春上・六七）の類も、それである。奏覧する相手である醍醐天皇を意識した使用であること、言を俟つまでもない。

〈男〉のことばの〈まうでく〉にもどる。〈はべり〉の類出、〈さぶらぶ〉の使用、また〈つかうまつる〉の使

用等との均衡を考えるならば、この〈まうでく〉も、かつて、「講座国語史5 敬語史」の筆者担当部分「第三章 古代の敬語Ⅱ」の「四 丁寧表現―被支配待遇表現」(大修館、昭和四十六年十一月)で指摘したように、被支配待遇的用法と解すのがしぜんであろう。「全講枕草子」の注解に言う「出火の意の『火いで来』をていねいに言ったものと解する」のがよい。

「あからさまにものにまかりたりしほどに」の〈まかる〉についても同様のことがいえる。謙讓語としての〈まかる〉は貴所から遠ざかる、退去するという遠心性移動を表わすのを典型的な用法とする。それをこの例に当てはめるなら、外出したことを述べているのであるから、自宅を貴所としてとらえたようなかっこうになり、滑稽な自己敬語ということになるが、〈まかる〉にも、〈まうでく〉の場合と同じように、聞き手に対して、謙爾畏敬の態度を持しながら、おのれの、またおのれと同化してとらえ得る人物の行動を謙抑的に話柄化する際にも使用されるという用法があるのであって、これもそれであると解すのが適切であろう。

次は、「いかでか、片目もあきつかうまつらでは」の〈つかうまつる〉である。この〈つかうまつる〉も、聞き手とおのれとの間に隔絶した格差を認め、謙爾畏敬の態度をもっておのれ、またおのれの側としてとらえた人物などの行動を相手の支配下にあるがごとくに抑えて話柄化する用法としての例と認めることができる。類例としては、『源氏物語』〈手習〉の巻の故朱雀院の御領宇治院の宿守のことばのなかにみえる例を挙げることができる。『狐の、仕うまつるなり』(『源氏物語大成』)によれば、「つかまつるなり」とする本文もある。筆者注)。この木のもとになむ、時く、怪しきわざなむ(『この「なむ」はよけい。ない本文あり。同)し侍る。一昨年の秋も、こゝに侍る人の子の、二つばかりに侍りしを、とりて、まうで来たりしかど、見驚かす侍りき』(日本古典文学大系・三四三ページ)の〈つかうまつる〉がそれである。相手は高僧の誇れ高い横川の僧都の一行であって、宿守との間の身分上の格差には大きな懸隔がある。

ただし、〈つかうまつる〉は、謙讓語としての場合はもちろんのこと、被支配待遇的な場合においても、格闘係の表示という点においては、〈を〉格を要求するのを通則とする。すなわち待遇的意味をはずしていうならば

へ——をすするVのように抽象できるのが通則である。その点、この例では、目が明く、つまり文字が読めるという自動性表現に用いられていて特殊である。あるいは、その点も、清少納言たちにとっては奇異に感じられたのかもしれない。

聞き手に対する謙抑の態度を表明する言辭は、用言関係の表現のみにとどまらず、体言にも認められる。それが「夜殿よどに寝て侍りける童わらわ」の「へわらはべ」である。この「へわらはべ」が妻を指したものであることは、断るまでもあるまい。自分の妻を指して「へわらはべ」あるいは「へわらべ」といった例としては、「大鏡」の世継、繁樹のことばのそれがよく引き合いに出されるが、平安時代を通じてみると、案外に用例が乏しい。「大鏡」の昔物語の条に、世継が良降衆樹が歌徳によって石清水八幡の憐憫を蒙り官途の榮進を得た話を語るのを聞いた侍まじがその誤りを指摘して「(石清水八幡でのごことではなくて)賀茂の御前にとかや、はるかのものごとがたりに童部申侍めるは」と述べるところがある(日本古典文学大系、二六三ページ)。日本古典文学大系の注も、日本古典全集の解も、その「童部」を愚妻としているが、佐藤球の「大鏡詳解」の説くように、この話はよく周知されていて、「遙に古き世の物語として、児童も申し伝へ居る」のように解するのがよい。すくなくとも愚妻の意とらねばならぬ積極的な理由は見いだしがたい。

この疑わしい例を除くと、世継、繁樹のことばの例のほかには、『宇津保物語』(嵯峨院)の巻の「かの大将のこゝのつにあたるむすめは、よりあきらがわらはべにてなんはべる」(「宇津保物語本文と索引本文編、三一五」という例が見当たる程度である。この「よりあきら」という人物は、上野宮頼明で、東宮たちに向つて、もっともらしく得々として自分の妻が世の男性の憧れの的である左大将家の九の君貴宮——実はその身代りの偽者である——であること語ることばである。世継、繁樹が常識を超えた高齢者であることはいうまでもないが、頼明も「古御子」として描かれており、かなりの年配と考えられる。なお詮索の要があるが、年寄が相手を意識して妻のことを口にするような際に用いられるどちらかといえば固苦しくもっともらしい印象を与えることばは使いだつたかと思われる。そうであるとすれば、愁訴する(男)も年配者であるとみるのがしぜんであろう。なお、『大

鏡』の先刻の存疑の例の侍は、「二十ばかり」の若者であり、その点でも他の例からは外れることになる。

萩谷朴は新潮日本古典集成「枕草子下」の該当箇所（第二百九十四段）で、寡小君・細君などと並べ、「夫人を若く小さい者のようにいうのは、一種の愛情表現であろうか」と注を施しているが、妻そのもの呼びかけて用いるならいざ知らず、他人に対することばのなかで用いられていることを考えるなら、やはり愚妻に当たると表現とみる方がしぜんであろう。ともあれ、〈妻〉〈女〉の類を用いず、〈わらはべ〉を用いているところに、〈男〉のもっともらしく改まった謙抑の態度を看取することができる。

以上、〈男〉のことばがいかにか懸懸丁重を極めたものであるかについて考察した。先に述べたように、かかる謙抑の態度を示す言辞の濃密な使用が恰好の地となつて〈夜殿〉の適正を欠いた使用の奇妙さを際立たせることになるのであるが、ここで思い当たるのが先にも触れた「文のことばなめき人こそいとにくけれ」の段である。そのなかには、「おほかたさし向かひても、なめきは、などかくいふらむとかたはらいたし。まいて、よき人などをさ申す者はいみじうねたうさへあり。田舎びたる者などの、さあるは、をこにていとよし」という箇所がある。この記事によれば、清少納言の脳裡に描かれている地方人像は、敬語をうまく操れない無作法なものの言い方をして平気である人間ということであるらしい。とすれば、この〈男〉のことばはそれから外れる。新潮日本古典集成版の注によれば、「馬づかきの御稔積みて侍りける家」は、藻壁門外、西の大宮西、中御門南にある左馬寮とか、その南にあったであろう右馬寮町に付属する厩町舎に付随していたものであるという。また先に紹介しておいたように定子が平生昌宅に滞在中の出来事ともいう。そうであるとすれば、おそらくはこの〈男〉は西京あたりに居住し、生昌宅に入用していた人物ということになる。なかなか饒舌であることといい、適正を欠くとはいえ〈夜殿〉のような洒落れた用語も口にしてみせる点といい、けっこうもの馴れた口のきき方のできる都会の住民の姿が浮かぶ。愚直一点張りの人物のように説かれることが多いが、どうやら再考の余地があると思われる。

三 「僧都の御乳母のままなど」の段の下衆の言辭について—その二

次に〈夜殿〉について考察する。

寢所を指す語群には〈夜殿〉のほかは〈ねや〉〈ねどころ〉〈よるのおとど〉〈よるのおまし〉等々がある。そのうちで〈ねや〉は、和歌にも用いられているし、物語類の地の文、会話文などにも用いられていて、偏りがない。その意味ではもともと標準的なことばといつてよい。それにくらべると、〈夜殿〉は、『倭名類聚鈔』の第十卷、居宅類第百卅六の「殿」の項で「寢殿」について和名として「乃言要目云與止寢室也」と記されているが、和文系文献に徴するかぎりでは、管見の範囲では、散文部分でのたしかな例は、ここの〈男〉のことばの描写のそれが唯一であつて、他はすべて和歌に集中する。もっとも、今本『とりかへばや』には「春宮はなしつぼにおはしませば、御つぼねはせんようでんにせられたり。しばしはよるくのほりて、ひとつ御丁によとのごもるに」〔古典文庫〕とりかへばや上・四六ページ〕という「よとのごもる」の例があるが、「大とのごもる」の誤写の疑いもあり、そうでなくても、平安時代の例と同列に扱うことはできない。

和歌のなかに用いられた〈夜殿〉は、地名の淀野と掛けた例、淀野を表面に立てて〈夜殿〉の意味を響かせた例が目立つ。次のような例がそれである。

1 ねやのうへにねざしとどめよあやめ草たづねて引くも同じよどのを

(後拾遺和歌集・夏・二二二)

五月五日御前より根を賜はせられたれば

2 たぐひなき玉のよどのあやめ草長きために引きてけるかな

返し、信濃の君

3 もろともに玉のよどのあやめ草引くべき今日の数ぞ知られぬ

(四条宮下野集)

4 あせめぐさよどのに生ふるものなればねながら人は引くにやあるらむ

(堀河御時百首和歌・夏・菖蒲・三八五)

1については、顯昭の『後拾遺抄注』に「淀ト云所ニアル野ヲヨドノトハ云也。アヤマモコモナドアル所也。又寝所ヲモ夜殿トイヘバ其ニヨセテネヤノウヘニナドハ誦也」(日本歌学大系別巻四)とあるのに従う。2・3については、「御前」が皇后寛子を指すことを思えば、それとの関係において、「玉のよどの」が皇后の寝所を意味し、また「あやめ草……」との関係からは淀野を意味することが明らかであろう。

4も、淀野の意味を表面に立て、夜殿の意を譬かせている。『堀河院百首』などの古注も、その旨を指摘している(橋本不美男・滝沢貞夫「本校堀河院御時百首和歌とその研究本文」研究篇参照)。

次のような例は、ストレートに夜殿を指して用いたものと考えられる。

5 置く霜の暁おきを思はずは君がよどのに夜離れせましや

(後撰和歌集・恋五・九一五)

6 玉垂のみすさわぐまで返す風よどののうちも涼しかりけり

(永久百首・夏・避暑・一七三)

用例が和歌に集中するという事実から考えて、〈夜殿〉には、身近な日常生活用語ではなく和歌を詠む折などに用いるべき文学的用語という意識があったものと思われる。やや時代が下るが、『八雲御抄』の巻第三、技葉部には、百科全書式分類のもとに歌語が網羅されており、その雑物部で寝所の項目下に特に〈よどの〉が挙示されているのも、そういう意識の現われと考えられる(『日本歌学大系別巻三・三四五ページ参照)。

すなわち〈夜殿〉は、単に寝所を指すのみではなく、歌語という特定の文体的価値をも具えた用語なのであって、その意味で無標の〈ねや〉に対して有標である。従来この有標性については顧慮されるところがはなはだ乏しかったと思われるが、清少納言たちの囁いの内容を的確につかむうえで、こうした〈夜殿〉の有標性を看過してはなるまい。

このような歌語は、無造作に散文の表現に用いるべきものではない。しかし生半可な知識しか持たないものは、歌語を用いさえすれば、表現が優雅になると錯覚しやすい。文彩効果を狙って無頓着に歌語を濫用し、嘲笑を招く。『源氏物語』の描く近江の君はそのよい例である。姉に当たる弘徽殿女御にはじめて消息を贈る場面が常夏の巻に描かれているが、その文面は「葦垣あしがきのまぢかき程にはさぶらひながら、今まで、影ふむばかりのしるしも侍らぬは、『勿来なこの関をや、すゑさせ給へらむ』となん。『知らねども、武藏野といへば』かしこけれども。あなかしこやく」(日本古典文学大系三二ページ)というものであった。当人としては精一杯気取ったつもりであるが、「ただいとひなびたるあやしき下人の中におひ出でたまへ」る悲しさで、その気取りがかえって裏目に出る。

この〈男〉の場合には、およそ風雅の世界とは無縁というイメージの強い〈下衆〉の口から、それこそ唐突に〈夜鷹〉がとび出した。そういう異和感がよりそぐわぬ印象を強めて嗤いを誘う。しかもそのすこし前では、歌語とおよそ正反対の「がうなのやうに、人の家いへに尻しりをさし入れてのみさぶらふ」という卑陋な表現を平気で口に出しているのである。

「がうな」とはヤドカリのことである。『山家集』には、「あま人のいそしくかへるひじきものはこにしはまぐりがうなしただみ」(下)という例があるが、西行や慈鎮の詠作には、伝統的な歌詠素材の枠にこだらぬ奔放さがある、それが大きな魅力になっていることを思うべく、一般的には、ヤドカリは和歌の世界では見向きもされない生物である。さらに、もしこの時代(がうな)と濁音で発音されていたとするなら——というのは、もともこの語は「かにみな(蟹螯)」から語形変化したものと考えられ、「かうな」と発音されていたのではないかと推定されるので——、おそらくは、聴覚印象からいって、例の「名おそろしきもの」の類にも入れつべき、むくつけきものとしての印象がさらに強かったことであろう。

臀部を指す(尻)も、貴婦人相手のことばとしては卑猥の感が強い。『竹取物語』には、やがて迎え討つことになる天人のことを竹取翁が罵って人聞きも憚らず「さが尻しりをかき出で、こゝらの公おほやび人に見せて、恥を見せ

ん」(日本古典文学大系・六二一ページ)と口走り、かぐや姫に「屋の上うへにをる人どもの聞くに、いとまきなし」とたしなめられる場面がある。こうした〈尻〉の使用は、その後の物語からは姿を消す。臀部についてのあからさまな言及の例がそもそも少ないのである。たとえば、『源氏物語』の帚木の巻における左馬頭の女性談義のなかでの例のように、まれに〈尻〉が会話文に用いられることがあるが、男性どうしのそののなかであって、貴婦人相手のことばの例としては、和文系の物語、日記の類では、他に類例を見いだしがたい。平安時代の〈しり〉は、人の後、牛車の後部の乗口、長く引いた裾等々についての例が普通なのであって、臀部を指した例は、たとえば、『宇津保物語』に一例、『落窪物語』に二例、『源氏物語』に一例というように少ないのである。そのような卑猥なことばが、いとも無神経に〈男〉の口から出たのである。〈夜殿〉とは奇妙な対照をなすわけで、その対照が〈夜殿〉を浮き上がらせて場違いな印象をより強める。

有標といえは、もう一つの有標性が〈夜殿〉には認められる。それは「殿」からの連想なのであろうが、立派やかな寝所のイメージとの結びつきが強く、陋屋のそれとは結びつきがたいということである。先に掲げた例のうち「玉のよどの」というイメージは、そのような〈夜殿〉と特定の貴賤観念との結びつきを我々に示してくれる。用例5・6も、見すばらしい寝所ではあり得ない。〈ねや〉にはそのような偏りは認められない。この点においても、無標の〈ねや〉に対して〈夜殿〉は有標なのである。こうした貴賤観念との結びつきということからいえは、〈よるのおとど〉〈よるのおまし〉と大きく一つに括うことができる。この二つの用語は、〈夜殿〉とは反対に散文専用の語であって、和歌には用いられない。その意味では〈夜殿〉と〈よるのおとど〉〈よるのおまし〉とは担当する文体を異にして相補的な関係にあるといえる。ただし、この二語は、主として天皇の寝所、それ以外の場合でも中宮、東宮、高位の貴族の寝所を指して用いられており、〈夜殿〉にくらべると、使用される範囲がより限定されているように思われる。

ともあれ、清少納言たちの通念としては、〈夜殿〉は、しかるべき貴族の寝所にこそふさわしく、〈下衆〉のそれにはそぐわないことばであった。しかし、〈男〉は、優雅なことばという意識だけがはたらいで、おのれの寝

所を指して用いることの愚かしさには思い及ばない。せっかくの敬語を縦糸横糸として織り上げた厚手の絨緞のごとき懇懇丁寧な口調も、この〈夜駈〉一語のために破綻する。〈夜駈〉の滑稽さを際立たせるための地の役割を果たす破目になる。

かくて、〈夜駈〉の使用は、二重の意味で清少納言たちの嘲笑を買うことになった。清少納言の即興の戯れ歌はその囁いの内容をよく示してくれる。戯れ歌のなかの〈よどの〉の使用は、淀野に掛けた型どおりの歌語としての使用であり、〈夜駈〉の適正な用法を〈男〉に教えるかたちになっている——もともと彼がそれを理解できようとは頭から考えてはいないであろうが、またこの〈夜駈〉には、株小屋からのボヤくらいで、〈夜駈〉と呼ばれるような寝所を持つ大邸宅がそももあつまり焼失するものかしらという皮肉が籠められてもいる。〈下衆〉の無知に対する残酷なまでの揶揄である。

その戯れ歌を短冊にしたためて与えるというのも底意地の悪さを感じさせる。これはすでに藤井高尚が『松の落葉』の一の巻で鋭く指摘していることであるが、当時短冊に和歌を記すという習慣はなく、〈男〉の助力乞いたげな様子を見て、しかるべき給付の証券と〈男〉が錯覚することを見こして、わざと短冊にしたためたのである。短冊は荷札としても用いられるが、給付の証券として利用されることも多かったのである。清少納言の狙いどおり〈男〉は、「ものいくらばかりにか」と問うて、さらに嘲弄されるのである。

こうした清少納言の言動を倫理上の観点からきびしく非難するのは容易である。しかし、あくどいほどに清少納言が〈男〉のことばにこだわった理由の詮索を忘れてはなるまい。清少納言をして度を過ぎた弱い者いじめに駆り立てるほどに、〈男〉のことばは、特に〈夜駈〉の使用は、彼女を刺激したのである。〈夜駈〉の使用は何故それほど腹に据えかねたのか。次にそこを考えてみたい。

四 「懸想人にて…」の段の供人の言辭について

ところで、特定の知識がなければ使用できないようなことばが〈下衆〉のことばの描写のなかに用いられていることについて、〈下衆〉がそのようなことばをみずからのことばとして操れるはずがないという前提に立って論ぜられることがある。河北藤の「枕草子論の一視点」(『国文学言語と文芸』七〇号・昭和四十五年五月)にみられる論考はその好例である。

この論文の「三 現実や人生への肯定的な見方」の冒頭で「懸想人にて来たるはいふべきにもあらず」(日本古典全書版では七〇段)の段が取上げられている。その段の全文を掲げれば次のようである。この論文では日本古典文学大系版によっているが、ここでは例によって日本古典全書版によって示す。もっとも句読点の打ち方、若干の表記面の違いを別にして、本文はほとんど同じである。

懸想人にて来たるはいふべきにもあらず、ただうち語らふも、またさしもあらねど、おのづから来などもする人の、簾のうちに人人あまたありてものなどいふに、ゐ入りてとみも帰りげもなきを、供なる男童など、とかくさしのぞき、けしき見るに、「斧の柄も朽ちぬべきなめり」と、いとむつかしかめれば、ながやかにうちあくびで、みそかにと思ひていふらめど、「あな、わびし。煩悩苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」といひたる、いみじう心づきなし。かのいふ者は、ともかくもおぼえず、このゐたる人こそをかしと見えこえつることも失するやうにおほゆれ。

また、さいと色に出でてはえいはず、「あな」(『底本「ある」。「る」を「な」の誤字として処理する説に従う。筆者注)と高やかにうちうめきたるも、「下行く水の」といとはし。

立部、透垣などのもとにて、「雨降りぬべし」などきこえこつも、いとにくし。いとよき人の御供人などはさもなし。君達などのほどはよろし。それより下れる際はみなさやうにぞある。あまたあらむなかに、心ば

へ見てぞ率^らてありかまほしき。

いま、当面に必要なかぎりにおいて、河北説をその論文中の言説を適宜引用しながらかいつまんで記せば、次のようになる。

屋外で主人が姿を見せるのを待っている従者や供人は「牛飼童や車副いや雑色程度の身分の」「卑しく無教養で、無学に近い当時の下層階級の男たち」であり、「述異記」に見える王質の故事を踏まえた「斧^きの柄^えも朽ちぬべきなめり」とか、「仏教思想上の高い概念」を表わす「煩惱苦惱」といった心境表現や用語が彼等自身のことばとして用いられたということは「到底あり得ないこと」であって、清少納言が「待つ身の辛さに同情し、それを如何にすれば表わし出せるかに迷って、選択の末に用いた語彙」なのであろう。それは、古歌の「心には下行く水のわきかへりいほで思ふぞいふにまされる」を引いた「下行く水の」と同性質の、「彼女の磨き上げた得意の用語」すなわち清少納言の用語であろう。清少納言が「こういう特異な語を用いてまで、従者たちの心理や苦しみを表現しようとしたその根底には、やはり彼らへの一種微妙な同情の心理というものが、かなりに働いていたためではあるまいか。それは、「下行く水のとほし」という短かい言葉の中に、豊かに込められている響きなのでもあった。」

右の河北説には以下に述べるような問題があり、首肯しがたい。

第一に牛飼童・車副い・雑色程度の身分の男たちが特定の知識の所有を前提する用語、表現を操れるはずがないという大前提のもとに、この段にみられる従者・供人の心情描写や不満のつぶやきの描写が彼らのことばの写実ではなく清少納言の創作であると主張するが、この大前提の立て方には観念的類型論的観点と現実的個別論的観点との混同があって、すこぶる問題である。たしかに貴族の対極に位置する階層として典型的に認識される平均的な人下衆の像は「卑しく無教養で無学に近い」人間像として形象化されるし、したがって漢籍・仏典に由来する用語や表現とは縁遠いはずといえることができるであろうが、だからといって、現実^{じつじ}に当時の〈下衆〉のすべてがまったくそのような用語や表現とは無縁であったということにはかならずしもならないはずである。現実的

個別論的観点からの綿密な考察という手続きを踏まず、観念的類型論的な〈下衆〉像のみにすがって極めつけるのは賛同しかねる。たとえば、『今昔物語』巻廿四の「大江朝綱家尼直」詩読三語第廿七」を読んでみよう。この話には大江朝綱邸に仕えて「物張」という、いうならば洗濯女のような仕事をしていた老尼が登場するが、「文章ヲ好ム輩十余人」を相手に詩について談じて彼らを驚かす。門前の小僧習わぬ経を読む式に、朝綱の詩を吟ずるのをふだんから耳に聞いていつのまにか、聞きかじりではあるけれども、漢詩に通ずるようになったというのである。もちろん、ざらにあることではなからうが、生活環境の如何によっては耳学問などによって、けっこうそれなりの知識を蓄え、気の利いた用語や表現など口にするような連中もあつたのであろう。

そのような意味では京やその周辺の住民が注目される。『大鏡』の序の部分に「下臈なれどもみやこほとり」ということばがある。世継の父親は「なま学生につかはれ」る低い階層の出身であつたが、「下臈なれどもみやこほとり」ということで読み書きができ、世継の生年月日をその産衣に書きつけておいたというのである。〈下臈なれどもみやこほとり〉あるいは〈みやこほとり〉は当時の諺であつたと思われる。当時における大都會である王城の地やその近辺の住民は、〈下衆〉であつても地方にくらべると民度が高く、なかには一応読み書きもでき、聞きかじり程度ではあつても物識りな連中がけっこういたのであろう。あの類焼の厄に逢つた〈男〉も、識字能力こそなかつたが、おそらくはそのような住民の一人であり、〈夜殿〉といつた用語を口にしたのであろう。そういうえば、『大鏡』の世継も、時平伝の菅公の条によれば、貧乏をかこつ「大学の衆」のもとに食物などを持参して、詩歌の手ほどきを受けたのであつた。本格的な素養はなくとも、〈斧の柄〉に待つ身のつらさを託したり、奉公の身のつらさを大袈裟に〈煩惱苦惱〉と表現するような牛飼童などがいたとして、特に奇とするには当たらないのである。

したがって、その〈斧の柄〉〈煩惱苦惱〉であるが、ともに高度の知識の所有を前提としてはじめて使用が可能であるように考えるのは問題である。〈煩惱〉が仏典由来の語であることは断るまでもないが、ふつう〈煩惱苦惱〉という組合せで用いられることはない。この組合せは〈惱〉の繰返しから生ずるリズム感を狙つた語呂合

せの発想に基づく表現で、民衆の間で好まれたのではないかと思われる。当時の知識人の用い方を考えるなら、『源氏物語』の〈螢〉の巻の有名な物語論を展開する光源氏のことばのなかの例をみるのがよい。物語の作中人物の造型に関して「菩提と煩惱とのへだたりなむ、この、人（＝作中人物。筆者注）のよきあしきばかりのことは変りける」と述べているが、このように、仏教上の概念としては〈菩提〉の対として用いられることばである。供人の不満のことばのなかの〈煩惱苦惱〉は、そうした仏教上の思想とはかけ離れたものであって、わが身のつらさを大袈裟に表現し、〈苦惱〉を強調するために〈煩惱〉を添えたようなものであることを注意したい。こうした用い方は、清少納言からみるならば、適正を欠いた勝手な用い方ということになるのである。そこに、〈下衆〉にほかならぬ浅薄さが露呈していることになる。だいたいが仏教関係の用語には、むずかしい理屈がどこまで理解されたかは別として、法会などの機会を通じて、広く〈下衆〉の層にも流通するようになったものがあつたことと思われる。深遠な思想の理解がともなわなければ口にし得ないわけではない。

〈斧の柄〉は『述異記』の王質の故事に由来する表現であるが、長い時間の経過の比喩として、貴族の間ではよく用いられたらしい。それが下層の階層にも広まるということは十分に考えられることであるが、ここでもそれがどのように用いられたかの詮索が肝要であろう。『宇津保物語』の〈吹上・上〉の巻や『源氏物語』の〈松風〉の巻などに例があるが、すべて教時間といったような短い時間の経過の比喩として用いられたものではなく、たとえば『宇津保物語』の場合であれば、一月ほどの経過を指すというように長い時間の経過について用いられているのである。『述異記』の故事に照らせば当然のことであつて、どれほど心理的には長時間の経過を感ぜられようとも、一日くらの経過について用いるとすれば、非常識な濫用として嘖われたものと思われる。主待ちの供人の場合はまさにそれであり、清少納言からすれば、〈夜殿〉の場合などと同様に、身の程をわきまえず洒落れた表現を口にしはするものの、肝腎な素養の裏付けのない悲しさで、たちまちぼろを出したということになるであろう。

さて、このようにみると、〈斧の柄〉〈煩惱苦惱〉が清少納言が供人の「待つ身の辛さに同情し、それを如

何にすれば表わし出せるかに迷って、選択の末に用いた語彙」であり、「下行く水の」と同性質の「彼女の磨き上げた得意の用語」であるとする論説もそのままには受け容れがたい。この段の供人は、露骨に待つ身のつらさを嘆いて主人への不平を鳴らす不心得なそれと、供人の分をわきまえて口もとまで出かかった嘆きを抑制するそれと、二類に分けて対蹠的に描かれている。そこを見落としてはなるまい。心理の描写に〈斧の柄〉が、ことばの描写に〈煩惱苦惱〉が現われているのは前者であって、こちらは同情どころか、「いみじう心づきなし……」と語氣強く非難されている。大袈裟な、またいい加減な〈斧の柄〉や〈煩惱苦惱〉の使用は、清少納言にとってはそうした供人の不躡な態度の露呈として不快感を強める要因としてはたらいっているのであって、同情を籠めて選び用いたものとはとうてい考えられない。

清少納言が相応の同情を示しているのは、「色には出でてえいはず」、「あな」とうめいてあとを呑みこむ供人の場合である。平安時代においては〈あな〉は、あとに形容詞・形容動詞の類を伴って用いられるのを原則とする。その際、形容詞・形容動詞は語幹が用いられるのが普通である。ときにわかか腹痛に周章する老女のことば「あな腹々。いま聞えむ」『源氏物語』(空蟬)のような例もあるが、「あな腹痛」の系として処理し得る。「あな」のみで一語文となっている例は、ここを除くと、管見では、近似の例として、鬼に襲われた貴姫の悲鳴の描写としての、問投助詞〈や〉を伴った「あなや」が『伊勢物語』の第六段に見いだせる程度である(この「あなや」については「一冊の講座伊勢物語」——有精堂・昭和五十七年十二月——所収の拙稿「伊勢物語の文章・文体」参照)。

つまり、一語文「あな」はきわめて特異な例なのであって、通説のように単に嘆息の表現としてすませるものではない。形容詞・形容動詞と組み合わせて用いられるのが普通であったことから推すと、〈あな〉のみで言い切った言い方には未完という印象が伴ったものと考えられる。供人は、主人への不満に連なる情感のあからさまな表出を抑えて、呑み込んだが、その「あな」のあとには、情感やその情感を喚び起した状況を表わす形容詞・形容動詞が言い残されているという印象が強かったにちがいない。すべてを言い尽せば、不躡の見本のこ

とばのなかにあるように「あな、わびし」のようになるであろう。その言い残された「わびし」の類が言外に感じられる。だからこそ、「心には下行く水のわきかへりいほで思ふぞいふにまされる」の古歌が思い浮かんで、同情が湧くのである。等しく賤しい階層の供人といっても、身の程をわきまえてそれなりに言動を抑制できるものと、露骨に言動に表わす不躰なものとの別があり、それがそのままその主家の身分・家格の優劣に対応するというのが清少納言の考え方なのであって、「斧の柄」「煩惱苦惱」と、「下行く水」とではまったく次元が異なるのである。

いずれにせよ、この段においても、〈下衆〉の用いる〈斧の柄〉そして〈煩惱〉が、適正な用法から逸脱しているという点で、かの〈夜殿〉と規を一にしているという事実を確認することが肝要であろう。

五 しめくくり

絶対主義の時代のフランス宮廷社会について社会学の立場から考察を加えたノルベルト・エリアスの著作が翻訳されている。波田節夫・中埜芳之・吉田正勝共訳の「宮廷社会」（法政大学出版局・昭和五十六年三月）がそれである。はるか海彼の、異なる歴史的社会的条件のもとに発生し形成された宮廷社会についての考察ではあるが、随処に平安時代の宮廷貴族社会を連想させるような記事がある。たとえば、エリアスは、豊富な事例を踏まえながら、階層制度的社会秩序の頂点に立つ絶対主義下フランス宮廷社会において、いかに礼儀作法が細心に練り上げられかつ厳格に実践されたかを明らかにし、その意義について、そうした礼儀作法の実践は、宮廷社会の自己表現にほかならず、各個人がそれを通じておたがいに際立ち合い、またそうすることによって、所属メンバーが皆一つになってその社会の域外にあるものたちに対して自分たちを際立たせ、そのようにして各個人としても、また貴族全体としても彼らの存在を固有価値として実証しているのであると述べている（第五章・礼儀作法と儀式——人間社会の権力構造の関数としての人間の行動様式と思考様式——参照）。また、一八世紀を

通じて最大かつもつとも規範的はサロンと称されたリネクサンブル元師夫人のサロンについてのゴンクール兄弟の論評が引用されている。それには上流社会を規定して、「上流社会とは下級社会、卑俗な集まり、地方社会からみずからを区別することを目的とした男女の集まりの一種であった。しかもそれは好ましい形式の完成によって、作法の優雅さ、感じのよさ、懇懇さを通して、相手への思いやりと生活方式の技巧を通してであった。(略)身なりと行動様式、態度と礼儀作法は上流社会によって厳密に定められた」とある(第三章、社会構造の指数としての住居構造)参照)。これらは『枕草子』の世界を読み解くうえで参考になりそうである。

清少納言の徹底した階層差別觀念が顯著に現われている段はあちこちにあるが、なかでよく引用される段の一つに「にげなきもの」がある。「にげなきもの」の事例としてまっさきに掲げられているのが「下衆の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるも、くちをし」なのである(四十三段)。自然現象においてすでに然りとするのなら、そのような差別觀念が文化の面においてより強く露骨に発現するのは当然であろう。清少納言の考えるところでは、言動のあり方は個体を通じた階層文化のきわめて明瞭な具現である——もつとも、はたして「下衆」の層に文化なるものを清少納言が認めたかどうかはなはだ疑問ではあるが。〈夜殿〉〈斧の柄〉の類は、たしかな教養に培れた、貴族のことばとしてこそふさわしく、貴族文化をはるかに劣位の階層から際立たせて彩るものである。もしそのような階層の出身者が口にするるとすれば、まさに「似げなきもの」であり、身の程をわきまえぬ言辭ということになる。しかも、彼らの口からそうしたことばが出るとき、結局は「下衆」独特の口臭を帯びたものにならざるを得ず、適正な用法から逸脱するのが普通であって、それは純正を汚すものとして憎むべく、また、所詮は猿真似は猿真似としてその愚かしさを嗤うべきものであった。「僧都の御礼母のままなど」の段の〈男〉の描写も、そしてまた「懸想人にて来たるはいふべきにもあらず」の段の供人の描写も、そのような清少納言の「下衆」観を見据えてとらえることが肝要である。

注

(1) この〈おれ〉については、拙稿「中世物語説話の表現」(『日本の説話7言葉と表現』東京美術 昭和四十九年十一月)および「二人称の〈オレ〉について——鎌倉時代を中心に——」(『青山学院女子短期大学紀要』第二十七輯・昭和四十九年十二月)参照。

なお、筆者は未見であるが、この田植え歌については、戸田芳実の「二〇——三世紀における農業労働と村落」(大阪歴史学会編「中世社会の成立と展開」所収)に論があり、勅農の鳥である時鳥に親狎感をこめて呼びかけた感謝の歌と解しているよしである。黒田日出男の「中世民衆の生産と生活」(『一揆4生活・文化・思想』—東京大学出版会、昭和五十六年・八月)の紹介によれば、戸田の説は、西岡虎之助の「民衆生活史研究」の引く「宴曲」その他の歌謡を援用して組み立てられているようである。「民衆生活史研究」(『福村書店』昭和二十三年十一月)の「中世歌謡に現われた農民の生活・二・稲作の業」の条に、「宴曲」の「郭公」の一部が引用されており、その本文は「何の田長ぞ名もしるく、おれ鳴いては早苗とり、丸は田に立つ管みに、賑ひ渡る君が世のげに治まる時の鳥」とある。それに従えば、〈オレ〉が用いられていて、「枕草子」の田植え歌との関係を強く印象づけられるが、統群書類従本を底本として京都本その他を対校した「宴曲十七帖附謡曲未百番」(吉田東伍・野村八良校訂・図書刊行会・大正元年九月)に依れば、該当本文は「己鳴ては」とあり、校訂者によって、「オノレ」とルビが当てられている。ここはリズムからみても〈オレ〉より〈オノレ〉の方が落ち着きがよく、〈オレ〉とするについては疑いがある。

ただ、田植え歌としては、「枕草子」の場合も、労働の辛さから、せきたてるように鳴く時鳥の悪口を言ったと解するのが妥当かどうかについては、なお再考の余地がありそうである。もっとも、田植え女の気持がどうであれ、それを聞いた清少納言が卑罵と解したということは、まずゆるがないといつてよい。

もう一つ、平安時代の和文系文献には対称の〈オレ〉の例が他に見当たらないと述べたが、小林芳規によって、訓点資料には、いわゆる角筆点に反射指示としての〈オレ〉の例があることが指摘されている(『石山寺藏沙弥十戒威儀経平安中期角筆点統稿』—『庄信編友博士 国語論集』昭和五十一年十二月)。「角筆文献研究の課題」—「国語学」一二八集、昭和五十七年三月)。

その例が反射指示があるいは対称かについては筆者に異論があるが、戸田芳実の説ととも別の機会に私見をまとめたい。

(2) 〈へかやつ〉の類例としては、「落窪物語」の権中納言の北の方のそれが注意される。貴婦人と卑罵の結びつきは、一見奇異な印象を与えるかも知れないが、この北の方がおおよそ貴婦人の理想像からは程遠い、いわゆる〈さがなもの〉として造型されており、ことさらに粗暴な言動の数々が戯画化されて描写されていることを思うべきである。この北の方の人物造型とその描写法については拙著「王朝貴族社会の女性と言語」(『有精堂』昭和五十年十一月)の第一部参照。

付記

秋山虔に「僧都の御乳母のままなど」の清少納言の笑いを論じた卓抜した論説がある。「ふたりの才媛」(二国文学解釈と鑑賞)昭和五十二年十一月)がそれである。「貴族的伝統的な美意識の護持や証しが、それからはずれるものに対する酷薄な遮断、排除によつて純化されるかたちを見るのが大事であろう」という指摘は傾聴に値する。予定の枚数を超過してしまったために小論では言及することができなくなったが、後日あらためて取り上げたい。